津田昇平教話　第七四話

令和三年三月十五日　朝の教話

天が下の氏子の死んだ御霊は、天地の間におるのじゃ。どこへ行くものでもない。わが家の内の御霊舎におるのぞ。わが墓場へ体を埋めておるから、墓場と御霊舎とで遊び鎮まっておるのじゃ。まつる所には、どこでも、そのまつりを受ける。

おはようございます。令和三年三月十五日の朝をお迎えすることができました。

昨日までは生と死について、つまり生まれるということ、そして生きるということ、さらに死ぬということについて、それはどういうことなのか。生まれるということ、生きるということ、死ぬということ。そして、死ぬというのは亡くなるということではなく、御霊（みたま）として生きるということ。つまり死者として生きるということになってくるんですけども、肉体はなくなったけれども、御霊として生きていく。そう考えると、ずっと生き通しになるわけですね。この命を授かり、そして何もかもご

用意して頂いて、恵んで頂いている中で、生きて本心の玉を磨(みが)く。たましいを磨く旅に出て、冒険に出て、旅に出てね、航海に出て、そして人生の終わりにはまた港に戻ってくる。そして肉体とたましいに分かれる。

生まれた時は、天から御霊、地から肉体を分けて頂いて、そして生かされて生きている。天地の間で、天地が恵んで下さったものを、調えて下さったものを頂きながら生きて、たましいを磨き、そして死ぬという時には、肉体とたましいが解(ほど)ける。引き分けになる。肉体はまた地に戻り、たましいは天に戻る。御霊は生き通し。というお話をさせて頂きました。

一つ、マラソンに例えたことありましたね。スタート地点は同じで、ゴールもスタート地点も一緒で、生まれるということは、天と地からそれぞれ御霊（みたま）、たましいと、肉体を分けて頂いて、そして人生スタートする。で、ぐるっと、四十二・一九五キロですね。ずっと走って、最後はまたスタート地点がゴールになって、そこに戻（もど）ってくる。戻れば御霊と肉体は解（ほど）けて引き分けになり、御霊は天に、肉体は地に戻っていくというところでしたね。

それが利守志野（としもりしの）さんの伝えの、いよいよまとめるとですね、

お天道様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげ、人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである。

【理Ⅱ　利守志野　一】

というご理解に表されると思います。

この「おかげの中に生まれる」ということが大事ですね。そして、「おかげの中に死んでいく」んです。「おかげの中で生活」をしますけれどね。この「で」とか「に」というのは、これはすごく大事ですね。ほんとに

その通りやなぁと思います。

こうして、まあ生と死についてお話をさせてもらいました。肉体に分け御霊様がお入り下さって、命の活動が始まります。人間は天から御霊、地から肉体を分けて頂いて、その小天地になるわけですけど、その御霊が入ってるからこそ、肉体も動くことができる。頭も働くし、心臓も動くし、呼吸もできる。手足も動く。血も流れる。転んで擦りむいても、また癒そうとする働きがある。これ、御霊が働いて下さってるからですねえ。だから肉体が働くことができるわけです。

このようにして、生きるということ、生まれるということ、生きると

いうこと、また、死ぬということの基本的なところをお話をさせて頂きました。

今日は、亡くなってから御霊（みたま）として、どのようにして生きていくのか。御霊として生きていくということは、「死んだんやから、もう生きていくというのは変な話やないか」というのは、それはちょっと違うわけですよね。それはまあ、生きてる人間中心で物事を考えて、生きてる人間が、「生きてることが全てである」というふうにして、思い違いをしてるということになってきます。

日本人、教祖様はもちろん日本人で、私たちも日本で生活しとります

けれども、日本人っていうのはもともと、亡くなるという、死ということについて、非常に身近に感じておりました。

天と地というものがありますね。じゃあ、天というのは遠い所にあるのかというと、物理的に遠い所にあるということではないんです。宇宙の果てのどっかに、空の果てのどこかに、天があるのかということではないんです。今皆さんが目に見えてるもの、どこを見てもそうですけれども、天と地で言ったら、地のものは見えますねえ。障子（しょうじ）が見えるし、御簾（みす）が見えるし、柵（さく）が見える。（柵は）木ですよねえ。御扉（おとびら）が見える。で、お互い、人間がいる。よく下を見たら、何か蜘蛛（くも）さんもいるかもしれない

し、畳(たたみ)もある。これ皆、地ですね。つまり物質です。

これ、地の部分で見えてるけれども、じゃあそこに天はないのかというと、そんなことはないです。これ、皆さん見てるところは、全部天が入ってるんです。実は天を全部見てるんです。見てるけれども、見えてないだけなんです。

命を、例えば私は、見て頂いたら私、喋(しゃべ)ってますねえ、今ね。これ、肉体が喋ってますけれど、御霊(みたま)が入ってるからなんです。だから私を見てるということは、私の目に見える地の部分を見てると同時に、天の働きを見てるわけです。木にしてもそう、紙にしてもそう、石にしてもそう。何でもそうですね。命を命たらしめる働き。これが天の働きで、万

物を万物たらしめる働き、これが天の働きです。ですんで、今ずーっと、ぐるーっと見渡したもの、目に見えるもん、触れること感じることができるもの、これ皆、地ですけれども、でもそれだけじゃない。それに溶け合ってるんです。だから天も地も両方見てるんです、本当は。ただ、肉眼で見える所は地でしか見れませんから。基本的には。

ですんで、天というのんは、少し遠い所のように思うかもしれません。物理的に遠いということではないんです。次元が違うから遠いというだけであって、実は天はずーっとどこにでもあります。天の中で生きてるんです。地のお世話になりながら、天の中で生きてるって言っても過言じゃありませんねえ。これをまず覚えておいて頂きたいと思います。

この御道（おみち）の信仰っていうのは、まあほんとにこう、日本で生まれて、教祖様も日本人で、日本で生活をして暮らしていたということがありますんで、日本の文化というのが非常に色濃いところがあるかと思います。

柳田國男（やなぎたくにお）さんという、民俗学者の方がおられましてね。ちょうど戦後に亡くなった方ですけれども。この方は日本の民俗学の礎（いしずえ）を築いた有名な方なんですね。『遠野（とおの）物語』であるとか。まあ有名です。

私は学院に行ってる時に、お墓についての論文とかを結構読んでたんですよね。ま、そういうのを好きなもんですから、取り寄せたり、そう

いうのを調べたりして、紀要（きよう）を読んだりして、お墓のことを研究してるような大学の先生の本をちょっと買って読んだりとか、なんかよくそういうのをしてたんです。

で、そこによく出てきてた柳田國男さんの『先祖の話』というのがありましてね。この『先祖の話』という本は一九四五年ですから、ちょうど終戦の年ですね。まだ東京大空襲やらなんやらというのもいろいろあった頃ですけれども、その頃に柳田國男さんが書いて発表されたものがあるんですね。

この方はもう、日本全国の風習とか、俗習（ぞくしゅう）とか、そういったものを非常に研究をされたお方なんですけども、非常に面白いですよねえ。

その中で日本全国をいろいろ調べて研究された。そこでも御霊（みたま）ということ、死者というものについても書かれた。それがまあ『先祖の話』という本なんですけども。

そこでではですね、人が死後に行く場所というのは、いわゆる人影がまばらなそういう墓所、つまりお墓ではないと。

確かにお墓っていうのは人影まばらですもんね。あまり人はいないです。でも、御霊様はそういうふうなものとして日本人は考えていなかったっていうんですね。お墓というのは、亡くなった人、死者がそこに入ってずっと居るという、居場所というふうに日本人は考えていなかった

と。

むしろそのお墓とかそういう場所っていうのんは、生者（せいじゃ）、まあ「しょうじゃ」でもいい、「しょうしゃ」でもいいんですけども、「生きてる者」ですね、漢字で書くと。生者と死者、亡くなった人ですね、生者と死者との待ち合わせ場所であって、約束の場所であって、そこに集まって斎（いわ）うという。「斎（いわ）う」っていうのはね、まつりごとですね。まつりごとっていうても漢字もいろいろありますよね。いわゆるご祭典の「祭」というのとは別に、斎（いつ）き祀（まつ）るの「斎（いつ）く」という、そういう「斎（いわ）う」ということですね。

そう考えるとお墓にしてもそうだし、この尼崎教会の御霊前（ごれいぜん）にしても

そうですけれども、これも生きてる人間と亡くなった方との待ち合わせの場所であり、約束の場所なんです。で、「ここで会おうよ」ということなんですね。御扉（おとびら）がありますけれども、御扉の世界というのんは、これは幽世（かくりよ）、幽世っていうのはあの世っていうことですね、あの世とこの世とをつなぐ扉になっているわけですね。だから「ここで落ち合おうよ」と。「ここで話そうよ」と。

基本的に天と地とはつながっている、溶け合ってると言いましたけれども、人間、生きてる人間の感覚で取ると、やっぱり遠いんですよ。ほんとは溶け合って自分の中にもあるんですけれども、手に取って見えるもんじゃないでしょ。自分の中にも、私の中にも天があるわけで、御霊

がある。

じゃあ腹を切って「これが天やで」「これが御霊やで」って渡せるわけじゃないんです。そういう意味じゃ、ちょっと遠いんです。私の中にありながら、でも遠いんです。それは、この物質の世界では現すことができないから。次元が違うんです。

けれどもお墓であったり、こうして祀(まつ)られてる場所というのは、遠いはずのあの世と、今生きてるこの世とをつなぐパイプ役になってるんですよね。そこがすごく大事です。

で、考えてみたらこれ、神様を祀(まつ)るというのも同じなんですね。神様

も天地そのものがお体で、でも人間の都合で、「ここに神様をお祀りさせて頂きますので、どうぞお願いいたします」って、人間の都合で来て頂いてる。これ生きてる者の都合です。

で、ここでお参りをさせて頂くということも同じことで、神様と生きてる者、そこに参らせて頂いてる者との約束の場所である。ま、そうも言えるんですね。

昔の日本人っていうのは、大切な人っていうのを近くに感じていた。

私たち残された者、生きている者が、亡くなった人、死者を思って生きる、私たちがですよ、私たちが亡くなった人のことを思って生きると

いうのではなく。ではなくなんです。それは今、皆さんしてるかもしれませんね、信仰頂いたら。

残された者として亡くなった人のことを思って生きるというよりも、死者たちと、亡くなった人と、共に生きるという考え方が主(しゅ)だったんですね。

これ、生きてる者が死者を思うというだけやと、生きてる人間を中心にして考えてる世界観になるんですけども。昔の日本人っていうのは、生きてる人間と亡くなった人間の境目というのは実は非常にあやふやになっている。だから生きてる人間と亡くなった人間とは、もう共に生きていくという、そういう感覚が普通であったというふうにして仰ってま

すねえ。

これ教祖様のお話をさせてもらうんですけど、後で。非常にもう通ずるといいますか、そのまんまやなぁと思います。

で、柳田國男（やなぎたくにお）さんは岡山のあの辺りのこともかなり、神社とか氏神（うじがみ）さんとか調べてらっしゃるんですけども、見てると面白いですよ。例えば「勢（せい）信心」とかね、「勢参り」とかね。こんなんって教祖様が仰ってるというよりも、あの当時あの辺りで、どこでもされてましたんでね。だからそのことについても、柳田國男さんがよく書いてらっしゃったのを覚えてます。

で、その『先祖の話』という本ですね。その中で柳田さんが仰ってるのが、

私がこの本の中で力を入れて説きたいと思う一つの点は、日本人の死後の観念、すなわち霊(みたま)は永久にこの国土のうちに留まって、そう遠方へは行ってしまわないという信仰が、恐らくは世の初めから、少なくとも今日(こんにち)まで、かなり根強くまだ持ち続けられているということである。

こういうふうにして考えておられる。

明治維新（めいじいしん）、ま、世が開けるというような感じでよく言われましたよね。明治維新でいろんな西洋の文化やら思想が入ってきたということによって、だいぶそういう、もともと日本人が持っていたものというのは薄らぐ部分もあったと思います。それも言われるんですよね。

けれどもそれでもずっとまだ、まだそれでも残っているという部分がある。死者とのつながりをね。だいぶそういう西洋的な、生きてる人間を中心にした考え方っていうのが入ってきたことによって、生きてる者が亡くなった人のことを思って生きるということに、ま、それでも全くないよりはいいんですけれども、なってきたんです。

でも、もともとは、生きてる人間は死んだ人間と共にあって、共に生きるという、その感覚が非常に強かったんですね。

で、これ、神様と共に生きるというのとも実は同じなんです。やっぱり神様に対しても、御霊様に対しても同じような感覚で、共にという部分が非常に本来的にはあったんですね。それはいつからっていったら、おそらくは世の初めからですから。この世の中ができてるその時からということを、おそらく仰ってるんですね。

それで仏教というのを、ま、柳田さん仰るので、仏教というのはこの世とあの世とをかなり峻別（しゅんべつ）してるって書いてますね。はっきりとこう分けるもんですから。死ぬということはあっちの世界に完全に行ってしま

う、もう渡ってしまう、渡り切ってしまう、っていうふうな感じになってくる。これは仏教は、まあ、そう。仏教も（外国から）入ってきましたね。

ところが、常民（じょうみん）の感覚はそうではない。つまり一般の人ですね。普通の人、ごく普通の民衆、庶民（しょみん）はそういう感覚ではなかったっていうんですね。

遠くに、もう遥（はる）か彼方（かなた）のあの世に行ってしまうということとは違って、当たり前のようにどこかにいると。ありきたりのところ、いつものところ、どこにでもいらっしゃる。遠くに行かないというだけじゃなくって、会いにも来てくれるし、こちらから会おうと思ったら会うこともできる。

どこで？　約束の場所で。待ち合わせの場所で。

で、お盆であったりお正月とかねえ、まあ春秋（しゅんじゅう）のそういうお祭りの時とか。春とか秋とかっていう時ですよね。こういう時のお祭りでまたしっかりと会うことができる。これ、普通に考えられてたわけです。

で、面白いなぁと思うのはね、ごく普通の人たちが了解されていた死者とのつながりのことについてなんですけれども、

第一には死してもこの国の中に、霊（みたま）は留（とど）まって遠くへは行かぬと思ったこと

これ、「常民（じょうみん）」という柳田さんの言葉なんですけど、いわゆる普通の一般の人たちということです。常民が理解されてた、そういうふうに認識をしていたということ。皆がですよ、死んでもこの国の中に御霊（みたま）は留まって遠くへは行かぬと思っていたっていうこと。

で、第二には顕幽二界（けんゆうにかい）の交通。

第二には顕幽二界（けんゆうにかい）の交通が繁（しげ）く、単に春秋（しゅんじゅう）の定期の祭だけではなしに、いずれか一方の心ざしによって、招き招かるることがさまで困難でないように思っていたこ

と

顕幽(けんゆう)の「けん」っていうのは、顕界(げんかい)。顕界っていうのはね、漢字で書くとまだ分かると思うんで、「顕現(けんげん)する」の顕(けん)です。顕(あらわ)れるという字ですよね。つまりこの世ということ。この世の世界ですね。その顕幽。「けん」は顕れる。「ゆう」は幽霊の幽、つまり幽世(かくりよ)ですね。つまり、この世とあの世の二界(にかい)、二つの世界。

顕幽二界の交通。交通は車とか信号とかの交通ですね。顕幽二界の交通が繁(しげ)く、繁くというのは、「足繁(あししげ)く」の繁くということです。この世とあの世の、この二つの世界の行き来。交通が非常に激しく頻繁(ひんぱん)であると

いうこと。で、それは単に春秋の定期の祭り、春季霊祭（しゅんきれいさい）、秋季霊祭（しゅうきれいさい）ってありますでしょう、それを仰ってるんです、単に春秋の定期の祭りだけではなしに、ここからが大事なんです。

「いずれか一方のみの心ざしによって、招き招かるることがさまで困難でないように思っていたこと」

これ面白いですねえ。何が面白いかっていうと、いずれか一方のみの心ざし、いずれか一方って生きてる人間、私たちが、御霊（みたま）様のことを思う。そうすると「招き招かるることがさまで」、「さまで」ということは、招き招かれるという具合で、それが当たり前で、そういうものとして、それが困難ではないように思っていた。

つまりね、私が例えば、和太先生（尼崎教会初代）を思いましょ。「和太先生」って言ったら、和太先生はこっちに来てくれはる。私の傍に来て、ま、このお広前だけじゃない。私が外で歩いてたとしましょう。ぶらぶら歩いて、ふっと「ああ、和太先生……」って、「あのね」って私がお話ししたら、もうその場にいて下さるということ。私が、まあ言葉はちょっと、表現は偉そうですけど、ここの「招き招かるる」という言葉でいうと、私がお声をかける、それが「招く」ことになる。じゃあ和太先生は「招かるる」になる。そうして、そこでもう落ち合う状態になるんです。

ところがね、それだけじゃないんです。いずれか一方っていうことは、

これ、御霊（みたま）様も生きてる者を呼ぶということを仰ってるんです。面白いですねえ。御霊様が生きてる者に声をかけてくるということが当たり前やったというんです。

これが日本人の普通の感覚で、今それ聞いて「はぁ、へえー。生きてる人間が思うんやったら分かる」、これ、だいぶ西洋の感覚というものを、生きてる者を中心にしたものの考え方にだいぶ、まあ言ったら、入り込まれてしまってるというところがあるでしょうね。それがいいか悪いかは少し置いときましょう。

でも、教祖様にしてもそうなんですけども、あの当時の信心でいうと、生きてる人間が御霊様だけを呼ぶというんじゃなくって、御霊様が生き

てる人間を呼んで、こちらは呼ばれて、つまりそこで交流があるということ。御霊様が働くということ。これがすごく大事になってくるんですね。

どちらかが願えばもうそれで往来ができてしまうというもの、叶(かな)うという、そういうふうにして考えてたわけですね。私たちが亡くなった人に対して心を寄せて、思いを馳(は)せますね。それと同じように、亡くなった人も生きている私たちのことを思って、寄ってこようとする。で、呼ぼうとしてくれる。これが第二やと。当時の人たちがね。

で、第三には、

第三には生人(しょうにん)の今際(いまわ)はの時の念願が、死後には必ず達成するものと思っていたこと

生人(しょうにん)、生きてる人ですね。「せいじん」でもいい。生きてる人の今際(いまわ)の時、今際の時っていうのは死ぬ時です。臨終(りんじゅう)の時、死に際(ぎわ)ですね。生きてる人がですよ、今から死にますっていう時、今際の時の念願が、死後には必ず達成するものと思っていたこと。

これによって子孫のためにいろいろの計画を立てたの

みか、更に再び三たび生まれ代わって、同じ事業を続けられるもののごとく、思った者の多かったというのが第四である。

こんなこと書いてますね。これ、面白いなぁって思うんです。で、教祖様を見ても、やっぱり確かにそうやなと思います。

生きてる人がね、今際（いまわ）の時、臨終（りんじゅう）の時にも念願、「念願かなう」の念願です。願いっていうのが、死後には、自分が死んでるんですよ、肉体はないんです、でもそれが、自分が亡くなってから、生きているこの世界で達成されるもんとして、またそのために、自分が亡くなって死者に

なってから、御霊（みたま）になってから、子孫のためにいろいろと計画を立てて働くことができるというふうにして考えるんです。

考えたら教祖様も、自分が亡くなってからも、これ、神様のお言葉ですもんね。

万国まで残りなく金光大神（こんこうだいじん）でき、おかげ知らせいたしてやる。

【覚帳（おぼえちょう）　二六―二二より抜粋】

って。

これ、ご自身が生きてるというよりは、ご自身の肉体はなくなって、死ぬということです。でも、そうすることによって、死者として生きる。御霊(みたま)としても生きる。御霊として生きる。生神金光大神(いきがみこんこうだいじん)っていう御霊として生きていく。

そこで、生きている時、生前の今際(いまわ)の時の念願、「万国まで残りなく金光大神でき、おかげ知らせいたしてやる」。死後には、自分が亡くなったら、必ず達成されるというふうに思い、そのために計画を立て、練り、そして働き続けるということをいうんです。で、それを生きてるお互いも皆そう感じてた。そう了解してたということなんですね。

じゃ、先祖というのはどういうことかってなってくると、ほんとに目には明らかに見ることはできなかったとしても、常に死者というのは、亡くなった人というのは、生きている私たち、生者（せいじゃ）と交わり、関わりを持ち、交流し、そして深く生きている者の心に寄ってこようと、寄り添おうと、そうして御霊（みたま）としてあの世で、幽世（かくりよ）で生き続けるという、そういう存在なんですね。

生きてる人間が「和太（かずた）先生……」っていうふうにして思う。そしたら和太先生、来て下さる。これ、今の人間、今の現代の人たちでも信心持ってたら分からんではないですよね。分かると思います。

ところがそれだけじゃないと。和太先生も生きてる人間に対して働き続けて、声をかけ続けて、寄り添い続けて、呼び出すということなんです。

どういう形にして？　御霊というのはどこにあるんですか？　問題です。これまでの話聞いてたら、分かりますよね。天です。天にありますね。そうすると、天で訴えようと思ったら、天に通じるしかないんですよね。じゃあどうするか。御霊様が生きてる人間に訴えるのは、二つの手段しかないです、基本的には。

一つは、私の中の分け御霊（わみたま）様に訴えるんです。私の中の御霊様も天で

しょ。和太(かずた)先生も天でしょ。つまりそこは天でつながっているんです。さっきも言いましたけど、天というのは全て、遠いといっても物理的に遠いんじゃなくって溶け合ってて、目に見える見えないの世界で考えた時に、見えないんですから。その点において隔絶(かくぜつ)されて遠いんですよ。見える見えないというふうなその物差しで測ったら遠いです。

ところが、実際には溶け合ってます。私の中にも天と地があるわけですから。今、皆さんの中にも天と地がありますでしょ。この世のもの見えるもの、今どこを見ても天と地で、ずーっと溶け合ってる状態なんです。重なってるんです、何もかもが。

だから、和太先生は？　っていったら、今、天にいらっしゃる。私の

中にも天がある。ここで実は同じ世界にあるわけですね。

じゃあ、和太先生が私のたましいに訴えてくるということは、これはできるわけです。私に和太先生が「昇平（しょうへい）、お前こうこうこうやから、こうしてくれよ。こうなってくれよ」って訴えたとしましょう。じゃあ私の分け御霊様に入ってきますね。じゃあそれ、私の意識、私の頭、私が理解してキャッチできるか。これ、私次第なんです。

私が常に天に対してアンテナを張ってるんか。自分の御霊、自分のたましいにアンテナを張ってるんか。内なる御霊、内なる神に対して、目に見えないけれども、このたましいに対して、声なき声にどれだけ真剣に耳を傾けてアンテナを張ってるかによって、天の言葉というのが私の

中でキャッチできるかどうかなんです。私はできるんです。これができるから天地金乃神（てんちかねのかみ）様の声も聴こえるんです。耳で聞くんじゃないんです。たましいで聴く。それが私の脳に入って、私が認識するということなんです。

だから亡くなった死者も、生きてる人間に対して話をすることができるんです。交流できるんです、普通に。これが一つです。それは、お互い生きてる人間が常にどれだけ、基本的には自分の中に天がありますからそれが一番近いと思います、それを意識して自分の御霊の声、分け御霊様の働き、それにアンテナを常に張ってたら入ってくると思います。

で、もう一つはそれがなかなか訴えてもできない場合はどうするんか。それは寝ている時です。これは前もお話ししましたけど、「夢」っていう言葉がありますね。夢っていうのは「寝目（いめ）」という言葉に語源があるということもお話ししたと思います。

「寝目（いめ）」というのは、「寝る目」と漢字で書きますね。お布団の寝具の寝ですね。まさに寝るという漢字と、目玉の目です。これで「いめ」と読む。寝目というところ、ま、平安時代の言葉です、そこから転じて夢という言葉になってきた。で、寝ている時の目、つまりたましいの目というふうな意味を持ってるわけですけど、じゃあこれは、たましいの目、天を通じて寝ている時に自分の中の御霊（みたま）を通じて現れてくるんです。そ

れが寝ている時です。

で、起きてる時っていうのは理性が、頭が非常に強く働きますんで、理屈で考えると、頭で考えるとね、そういう目に見えない世界の声というのはなかなかキャッチしにくいんです。だって肉眼があったりするとですよ、生きてると、ま、理屈で考えます。目に見えるものしか、やっぱりついつい、分かりにくいんですよ。まあ分かりやすいです、肉眼の方が。手で触れられるもの、物質的なもの。

でもどうしてもそれが強くなるもんですから、目に見えない天の世界というものを十分にキャッチするのがちょっと苦手です。常に意識したらそんなことはないんです。私なんてもう常に、そらもう何しててても天

の部分とつながってるから、だから先のことやら後のことやらいろんなことも教えて頂くんですけど。でもこれ、ほんとは誰もができることやし、やるべきことやと思ってます。人間であればできるはずなんです、ほんとはね。

じゃあ夢の中で、たましいの目で、夢を見て、和太先生が出てくる。例えばこれ、たまの先生（三代先生）がね、二代先生（夫・慎治先生）が亡くなって、たまの先生がお一人で御用するようになって、戦後の真っ只中で大変な中でどうするかってなった時に、神様に向かい、また御霊前で和太先生、慎治先生に縋ってやっておられたんですよね。

で、ある時夢を見たら、枕元(まくらもと)に初代和太先生が出てこられた。で、それはお装束(しょうぞく)を着ておられて、そのお装束の正装で、白いお装束で、全部にお剣先(けんさき)、昨日お話しましたね、剣(つるぎ)の先の形のあの和紙のものですね、お剣先がばあっと全身に貼られてあったと。それに覆(おお)い尽くされているお装束を着た和太先生が出てこられて、そして、もう非常に神々(こうごう)しかったと。そこで目が覚めたというんですね。たまの先生がそれを見られたのはおいくつなんでしょうね。まあちょっと詳しくは何歳とは言いません、でもまあ三十代くらいやったんでしょうかね。四十にはいってなかったかもしれません。

そしたら、そこからご晩年まで、一〇三歳まで生きられましたから六

十年余り、ずーっと、たまの先生の中で生き続ける出来事なんですね。

これ、和太先生（かずた）がお働き下さって、これ御霊様（みたま）が働いてるんです。生きてる人間じゃないです。たまの先生が働いたというだけじゃない。和太先生が働いて、でも、たまの先生が起きてる時にパッと話して分かってくれたらいいけど、分からんから夢の中にも出てこようと、一生懸命（いっしょうけんめい）働いて出てきて下さった。夢の中で、たまの先生の理性がおさまって休んでおられる。肉体は最小限の生命活動。御霊は常に働いている。だから呼吸もできる。疲れも取って下さる。その時に御霊を通じて、天におられる和太先生が、天はすぐどこにでも溶け合ってますから、それがた

まの先生の天の御霊様に通じて、夢の中に出てきて下さる。そうして話をして下さる。言葉にしてなくっても夢の中で話すこともあれば、夢の中で話さなくても枕元(まくらもと)に立って、ずーっとその神々(こうごう)しいお装束(しょうぞく)で立っておられる。それを夢に見たと。

これ、たまの先生が求めただけじゃなくって、お縋(すが)りもしたでしょうから、「和太先生」と仰ったでしょうね。ほんとは和太先生、もう傍(そば)に居てらっしゃったと思いますよ。御霊前(ごれいぜん)に入ってご祈念してる、でも、たまの先生はまだそこまで開かれてなかった。たましいが磨(みが)かれてなかった。それを感じ取ることが、目が覚めてる時に感じるだけの力が、まだなかった。でも寝かしてもらって、休ませて頂いて、理性が緩(ゆる)んで、お

さまって、御霊の働きが強くなる。そうなった時に、天におられる和太先生が働いた時にそこでつながる。寝てる時やったら、たまの先生でもキャッチできるようにして下さる。ま、これもさせて下さるのは、天地金乃神様(てんちかねのかみ)がこの天地を司(つかさど)ってるから、そうなってるんですけど。

こうして御夢(みゆめ)を通じて意識に訴えて下さるんです。磨かれていけば、生きてる人間でも、目が覚めとっても、常に天を意識して自分の御霊(みたま)の働きを意識して生きていくと、生きてる時、目が覚めてる時でも自分の分(わ)け御霊(みたま)様に訴えて下さいます。それはこちらがちゃあんと理解してたら、ちゃんと認識できるし、誰でも神様の声は、声なき声、聴こえますよ。

だから神羅万象（しんらばんしょう）ことごとく、神様の声として聴こえます。

だから私、木でも、草でも、石でも、何でも会話ができますよ。普通にできますよ。昔からできてます。でもこれ、皆誰でもほんとはできるんですね。

こう考えてくると、天というのは、今私たち、残されて生きてる者を生かしてくれる働きでもあるし、亡くなった人があの世で、幽世（かくりよ）で、生きる世界でもあるんです。生きてる世界でもある。

だから、和太（かずた）先生も、慎治（しんじ）先生も、たまの先生も、由幾（ゆき）先生（初代和太先生の奥様）も、みんな生きてるんです。皆さんのご先祖も皆、生き

てるんです。皆さんが慕(した)っていらっしゃる御霊神様(みたまのかみ)、御霊様、ご先祖、家族、皆生きてらっしゃるんです。皆さんが声をかけたら、いつでもそこに来て下さる。

でも一番は、やっぱり約束の場所として、こうして御霊前(ごれいぜん)であったり、これは場の力があります、場の力があるからやっぱりつながりやすいですよ。こちらの意識も違いますでしょう。普通に起きてるお互いが「やあ、おはよう」「おはよう」って喋(しゃべ)れる、喫茶店で喋るというのとは、訳が違います。それは地の力が非常に強く出てるでしょうからね。

でもこういう場を整えて頂いて、神様に、御霊(みたま)様に、この外殿(がいでん)の柵(さく)を

境にですよ、天地金乃神様（てんちかねのかみ）と人間の世界とをつないで下さるし、天ともつないで下さるんです。そこを結んで下さるのが結界（けっかい）ですね。神の世界と人間の世界を結ぶのが、この結界。

亡くなってる御霊（みたま）様と、今生きているこの世との、天と地と、ま、ほんとは全部つながってるというのはそうなんですけれど、物理的には離れている、物理的な物差しで考えると次元が違って隔絶（かくぜつ）されてる、離れてる、物理的な物差しではということですよ、そこをつないで下さる。だから結界があるんです。

結界の「結」というのは、世界を結ぶってことですね。二つの世界を

結ぶということ。神の世界と人間の世界を結ぶし、御霊の世界と、あの世とこの世を結ぶし。それが結界ですね。それをするのが取次師(とりつぎし)になってきます。

こうして、私たち生きてる者が、亡くなった御霊(みたま)様に話しかける。声かける。これは全然片手落ちなんです。むしろ大事なのは、御霊様はずーっと生きて、肉体という服を脱いで、死ぬというのは肉体という服を脱いで、御霊として働く。じゃ、その御霊様が御霊神(みたまのかみ)のように生きてる間に徳を積んで、人を助けて徳を積んで、生きてる間に神になって、生きてる人たちからも拝んでもらうぐらい、拝んでもらうということは、

そこにもう神様の働きが命を通して出てたということですね。

金光大神（こんこうだいじん）の姿、衣服におかげはなくって、金光大神の御霊の働きにおかげがあるって教祖様仰いましたけど、和太（かずた）先生、慎治（しんじ）先生、たまの先生のお取次（とりつぎ）を頂いて、拝んでらっしゃった方っていうのは、皆、和太先生、慎治先生、たまの先生の御霊の働きにおかげがあって、だから皆拝んでらっしゃる。亡くなっても拝んでらっしゃる。お縋（すが）りされてる。それだけ生きてる間に人を助けて、徳を積んでるからですね。

だから、生きてる間に神にならずして死んで神になるものかって教えがありますけど、そうなんです。死んだら御霊神（みたまのかみ）になるってことじゃないです。これはないです。肉体っていう服、脱ぐだけですから。服を脱

いで何で神になるかって話になってくる。それはないです。ただ御霊になるだけです。

でも生きてる間に神になってると、死んでからも神でいられます。肉体という服を脱ぐだけの話ですから。じゃあ御霊は生き通し。天にいる。天は遠いんですか？　いやそんなことはない。今、目の前にいる。どこにあっても天はあるし、御霊様は私たちが声かけたら、いつでもそこに話ができる。

でもこういうお墓であったりとか、こうして御霊様をお祀りする場所というのは、特別に、格別に、家の御霊様のとこでもそうですよ。仏壇で

もそうかもしれませんね。ま、そうでしょう。御社(おやしろ)でもそうです。そういう場、とりわけこのお広前(ひろまえ)は違いますよね。ここは、より、つながりがしやすい場所です。

お互いお参りして、額(ぬか)ずいて、ご祈念させて頂いて、意識を神様に御霊様に向けていくわけですから。それだけでも全然違います。だから神様も声をかけやすい。届きやすいし。御霊様も声をかけやすいでしょう。実際かけてるんです。ただそれをどれだけこっちがキャッチできるか。そこが信心ですよね。それを高めていく。磨(みが)いていく。本心の玉をこっちも磨いて、交流がしっかりできるようになっていく。これが信心ができてくるということでもあるんです。

ここを求めていかんとあきませんねえ。でないと結局、神様の声やら御心(みこころ)やっていうものが分からんのとちゃいますか。それを分かっていくために信心してるわけでね。

教祖様のご理解をご紹介しましょう。「天(あめ)が下の」天が下、天(てん)の下ってことになりますけど。天(あめ)が下、世界のっていうことですね、いわゆるね。

「天が下の氏子(うじこ)の死んだ御霊(みたま)は、天地の間におるのじゃ」うん、やっぱり天地の間ですね。これ面白いですねえ。天に帰るとは仰いますよね。いや、そうなんです。

でも天はどこにあるかというと、この地と実は繋(つな)がってるんです。（御

霊様は)天にいらっしゃるんですよ。だって肉体がないじゃないですか。だから地じゃないです。でも天というのは、そもそも地に溶け合ってるということですから、だからそういう意味じゃ私がいるのは天地でしょ？　肉体もあります。でも私、和太先生と話できますよ、いつでも。

今日、私、御霊前(ごれいぜん)に、内殿(ないでん)に入ってね。で、今日のお話は御霊(みたま)様のお話しようとは思ってはいました。じゃあ御霊前から、私そんなこと話はせんでも、御霊前から「和太(かずた)先生、慎治(しんじ)先生、由幾(ゆき)先生、たまの先生、御霊の神々(かみがみさま)様、御霊様」とお話ししたらね、「えらい今日は楽しみにしておる」って。「今日は話をしてくれるんやろ。これ聞いて、参ってきた人が、話を聞く者が分かってくれたら思ったら、楽しみにしてる。頼むぞ」

って。そうやって言われて、「はぁ」って。私からは何にも、「今日、こんな話させてもらいますから」っていうふうにして、自問自答したわけでも何でもない。一方的ですよ。あちらから話をされてくるんです。で、これ当たり前なんです。日本人はそれを感じながら生きてきたんです。いつから？　世の初めから。

天(あめ)が下の氏子(うじこ)の死んだ御霊(みたま)は、天地の間におるのじゃ。どこへ行くものでもない。わが家の内の御霊舎(みたまや)におるのぞ。わが墓場へ体を埋(う)めておるから、墓場と御霊舎とで遊び鎮(しず)まっておるのじゃ。まつる所には、どこでも、そ

のまつりを受ける。

【理Ⅲ　御理解拾遺（ごりかいしゅうい）　三十六より抜粋】

これ、分かりやすく言うと、つまりお墓であれ、あるいは家の御霊舎（みたまや）であれ、このようにお広前（ひろまえ）の御霊前（ごれいぜん）であれ、とにかくどこでもいいんです、ほんとは。ここはそれぞれ約束の場所なんです。待ち合わせ場所なんです。とりわけ、どこにいてもこちらが意識したら話はできます。来ても下さる。向こうも呼ぶ。でも、それはまあ言ったらね、現代で言ったらＬＩＮＥでやり取りする程度のものです。せいぜい電話で話をする程度。実際に、直（じか）に会って、より深く交流しようと思ったら、約束の場所、待

ち合わせの場所に行って実際に会わんといかんのです。それがどこかと言うたら、この広前の御霊前であり、そしてお墓であったりするわけです。

でも連絡を取ろうと思ったら、どこでも取ることができます。皆さん、今、どこににおっても、世界中どこにおっても、家の人とＬＩＮＥできるでしょう。メールだってできるでしょう。電話だってできるでしょう。でも実際に面と向かって会うというのとは、ちょっと違う。これと同じような理屈やと思って下さい。

じゃあ「どこどこで会う」って、「じゃあ何月何日、どこどこで会おうね」って、離れてても飛行機で寄って集まって、その日その場所で会う。

これできますね。同じことです。きちんと、その日その場所に、約束の場所に、会うか会わんか、会いに来てくれるか、それはすごく大きいことなんです。

で、「まつる所」、こっからが大事ですねえ。「まつる所には、どこでも」どこでもっていうのは、どこであったとしてもっていうことなんですけども、「まつる所には、どこでも」どこであったとしても、「そのまつりを受ける」。どこでもって言いますよ。墓場？　霊舎（れいしゃ）？　御霊前（ごれいぜん）？　もちろん。でも、別にどこでもまつるって。ここで構いません。どこでもそのまつりを受けると。

つまり、交流の場所をここと定めたんであれば、喜んで来て下さいま

すよ。残された者がかわいいですから、だからお話ししたいです。ちゃんと皆さん感じてます？

天(あめ)が下の氏子(うじこ)の死んだ御霊(みたま)は、天地の間におるのじゃ。どこへ行くものでもない。わが家の内の御霊舎(みたまや)におるのぞ。わが墓場へ体を埋(う)めておるから、墓場と御霊舎とで遊び鎮(しず)まっておるのじゃ。まつる所には、どこでも、そのまつりを受ける。

【同】

これ、今、私が話ししたんと結局同じことなんです。どこに行ってもお話はできるんですよ。常に交流するって柳田國男(やなぎたくにお)さんが言ってはった三つ目のところですね。生きてる人は、今際(いまわ)の時、その時の念願が死後には必ず達成する、成就するものと思っていた。これによって子孫のためにいろんな計画を立てて、それが成就するように働き続ける。そういうもんだと。

まあ、そうでしょうね。教祖様も今でも働いてらっしゃるでしょう、ずっと。和太(かずた)先生もです。ただね、生きてる人間がしっかりそれを感じ取って、その御霊(みたま)様の働きを引き出して、働きやすいようにせんかったら、これ、この地には現れてこないんです。

だから、どんなに徳を積まれて、生きてる間に徳を積まれて、幽世(かくりよ)に、あの世に行ってから御用をせえっていう教えもあります。そやけど、じゃあ幽世で御用する先生が、立派な先生おるんやったら、もっとね御道(おみち)も広がってますよ。そうはいってない。しおれてってるとこがある。じゃあどうしてか。じゃあ、尼崎教会はご比礼(ひれい)頂いてる、どうしてか。

そら、働いて頂いてるからですよ。私一人が働いてるんじゃない。私が勝手にでも、尼崎教会だけのみならず、ご縁があった御霊神(みたまのかみ)様には皆お働き頂こうと思って勝手にお慕(した)いしてますよ。どこぞの教会の初代の先生であれ、何であれ。私が一方的にでもお慕いしますよ。そしたら皆さん喜ばれて、皆来て下さいますよ。働いて下さいます。現れてきます。

それ、御霊神様(みたまのかみ)が働かれるこの世で、そのための道をこちらも意識して、それを分かって、広げて、下地を作って、働いてもらえるようにするからです。どこで働くんか？　一人一人の氏子(うじこ)の身の上にどうぞお守り下さいと。金照明神様(こんしょうみょうじん)のお働きも頂くし、片岡(かたおか)先生のお働きも頂くし、双岩(ふたいわ)の先生のお働きも頂くし、玉水(たまみず)の先生のお働きも頂くし、どこでもいいですよ。佐藤範雄(さとうのりお)先生、近藤藤守(こんどうふじもり)先生、白神(しらかみ)先生、難波(なんば)なみ先生、誰でもいいんです。こちら側が勝手に、頂きたいなぁと思っている。勝手にですよ。

でもそれ、皆、嬉(うれ)しいですよ。そらそうでしょうねえ。せっかく積んだ徳ですもん。使(つか)うてもらいたいですよ。自分だけでは、なかなか使え

んですよ。生きてる者が意識して、生きてる者からつながって働きかけてる具合においては、御霊様だって、御霊神様（みたまのかみ）だって、働くことができる。

これ、神と人、あいよかけよと同じなんです。神様だけで働けるわけじゃないんです。神様の働きを現そうと思ったら、生きてる人間が神様にしっかり働きかけんといかんのです。あいよかけよの働き合いなんです。神様は人間に働いて下さる。でも人間も神様に働きかけんといかんのんです。そうして初めて、あいよかけよの働き合いが生まれて、神様のお徳、ご先祖やったらご先祖が積まれたお徳が現れるんです。そうで

なかったら、めぐりばっかりが働くんちゃいますか。

だから、天というのは非常にね、いろんなものがね、力が、パワーが、もう有り余っているはずなんですよ。それを引き出さんとあきません。それは何もね、先祖を拝め拝めって、そんな単純なものでもない。ご先祖っていっても普通に考えて下さい。肉体っていう服、脱いだだけですから、そんな力ありやしません。でも、ほんまに力あるなぁっていうのは、それは、生きてる間に徳を積まれて神になってる人は死んでも神様ですから、それは縋(すが)った方がええと思います。

生きてる人間に、もう縋って「助けてー」言うても、そんなん何も大してできませんで。そやけど思ってはくれるし、できる範囲のことは働

こうとして下さるでしょう。それは、あの世に行ってもそうです。

じゃあ難儀(なんぎ)で助からん、浮かばれん御霊(みたま)やったら、これはなんともしようがないですなぁ。こっちも背負わんといかんとこがあるでしょうね。それでも褒(ほ)めてやって、声をかけて、かわいがって、生きてるもんとして、かわいいかわいいと思ってると、そうすると御霊様は浮かばれていきますし、浮かばれていくと、今度働くことができるし、守っていくことができます。

悪霊(あくりょう)や死霊(しりょう)やって昔から言いますわね。もう寂しくって、苦しいんでしょう。生きてる間に浮かばれんから、死んでも浮かばれませんわ。

でもこちら側がいつも大事にして、神様に祈ってあげて、そしてかわいいかわいいって思ってたら、だんだん御霊が浮かばれていく。そしたら、悪霊死霊いうて取り憑(つ)いて、自分を苦しめてるように思ってたけど、そんなことはない。ただ助けて欲しいから、お縋(すが)りしてるだけのことです。それをこちらが神様に祈ってあげたり、そうすると、「ああ、祈ってくれてありがとう。だんだん浮かばれて、救われるわ」ってなってきたらどうなるか。御霊として働いて、その人を守ろうとし始めるんです。だからそれが守護霊(しゅごれい)になって、守ろうとしてきますよ。

これ、考えたら当たり前なんですよね。ま、こういう話して、分からん人には分からんし、危ない話してる人や思うんでしょう。そやけど、

当たり前の話なんです、これね。

日本人はこういうふうにして、生きてる人間と、亡くなった方と、非常に関わり合いながら生きている。で、それが、教祖様も非常に大事になさっていたし、当たり前のようでした。

神様と人間でも、「あいよかけよの働き合い生まれ」です。御霊(みたま)様と人間でも、生きてる人間でもですよ、同じなんです。働き合いなんです。

この働き合いがあって初めて、そのお働きが現れてくるということです。それを意識しながら、神様にも向かい、御霊様にも向かっていかんとあきませんね。

今日は御霊(みたま)様のお話をさせて頂くことができました。今日は今日で、神様から新しい一日を頂いて、神様と共に生かして頂きます。

心を神様に向け、また、和太(かずた)先生をはじめ……話を継いだら、もうちょっと大事なこと、ひと言だけ言うたら、ここにお参りしてるということは、和太先生、慎治(しんじ)先生、由幾(ゆき)先生、たまの先生にはね、もうしっかり縋(すが)った方がいいですよ。縋ったら、縋って、そらねえ、間違いなくかわいいと思ってますよ。かわいいですよ。そら、つながりの深さうんぬん関係ない。血縁なんて関係ありゃしません。この広前(ひろまえ)で、命を懸(か)けて

御用された御霊(みたま)様は、参って来はったら、かわいいに決まっとるんですよ。どこで信心してるとかせんとか、違う宗教であるとか関係ないですよ。来た人は皆かわいいですよ。「よう来たなぁ」って嬉(うれ)しいですよ。

で、縋って、声でもかけてもらおうもんなら、もうそれだけでも働いてますから、人間から。じゃあ、和太先生、慎治先生、歴代の先生方もね、働けるんですよ。一方的じゃあ難しいんです。ま、それでも神様の徳を頂かれてますから、できることはあるかもしれません。そやけど、こちらが声をかけて、こちらから働いて、した方が、あちら側が働きやすいんです。いつもアンテナ張ってたらいいんですよ。一方的でもいいんです。一方的にお慕(した)いするだけでも、実は一方的にならんのです。相思(そうし)

相愛(そうあい)になって、いっつも働いて下さるもんなんです。これ大事なんですよねえ。

だから尼崎教会はね、初代先生を「津田和太(つだかずた)先生」と仰るんです。とても徳の高い先生ですよ。二代先生、私にとったらおじいちゃんになりますけど、「慎治(しんじ)先生」と仰います。で、三代先生は、「津田たまの先生」と仰います。私のおばあちゃんになります。で、「由幾(ゆき)先生」って、私は由幾先生って申し上げてますけれど、教師ではなかったと思います。でも私はもう、初代和太先生の奥様として目に見えない御裏(おうら)をずっと支えて守って下さった、だから私の中では由幾先生とお慕(した)いしてます。いい

んです一方的でも。一方的と思ってもウェルカムなんですからねえ。

だってここ、私が今、目に見える形で、広前の守としてさせてもらってますけど、ずーっと今も、御霊様として働いて下さってるんですから。嬉しいに決まってますよ、そんなん。かわいいに決まってるじゃないですか。せっかく生きてる間にそれだけ人を助けて、徳を積んでるじゃ使わんと勿体ない。使うてなんぼや。宝の持ち腐れやもん。使うてあげて下さいよ。喜ばれますよ。

ですんで、神様に、御霊様に、また金光大神様にお縋りしながら、信心のお稽古を今日も一日させてもろうて、神様のおかげを身いっぱい受

けるように、この身この心を神様に向けて信心させて頂きましょう。何事も無礼と思わんと、神様にお縋りさせて頂いたらおかげが受けられます。枯れ木にも花も咲くし、ない命もつないで頂けます。そして、わが身におかげを頂いて、また、苦しんでる人、困ってる人、「世間になんぼうも難儀な氏子あり」ですから、取り次ぎ助けるとまでは言いませんけれども、お手引きをさせて頂いたり、祈らせて頂くことぐらいはできるかと思います。

そうやって神様の御心にかなうように、神様に喜んで頂けるような、そういう信心をさせて頂きましょう。今日もどうぞ、それを続けて下さい。

よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話 第七四話

令和三年三月十五日 朝の教話

令和四年四月十六日　初版発行
令和四年七月十日　第二版発行

発行所　金光教尼崎教会
〒六六〇―〇八九二
兵庫県尼崎市東難波町三―七―五